

AIスピーカが注目の理由

ご購入はこちら

中村 仁昭, 岩貞 智



写真1 IT大手がハンズフリーでいろいろなことが行えるスマート・スピーカの販売を始めた
アマゾンのAmazon Echo



写真2 ソフトウェアが用意されていてラズベリー・パイ等に組み込むことも可能

スマート・スピーカが注目の背景

● IT大手がこぞって環境を開放した

2014年の11月にアマゾンがAmazon Echo(写真1, 写真2)と呼ぶAIアシスタント付きのタワー型のWi-Fiスピーカを発表しました。そのスピーカにはAlexaというAIアシスタントが搭載^{注1}されており、ディープ・ラーニングを応用して高めた「音声認識精度」と「会話能力」から、AIスピーカ^{注2}またはスマート・スピーカと呼ばれ、注目されるようになりました。当時はアップルのSiriや、グーグルのGoogle Nowなどがあり、大手しか開発に携われない印象でした。

2015年にアマゾンがAlexaと連携できる開発用SDKをサードパーティ向けに公開すると、自社サービスにAIアシスタントを利用したい企業や、スマート・スピーカと連携してサービスの入り口の幅を広げたい企業に広く受け入れられることになりました。

注1: 正確にはスピーカの中には人工知能はいません。クラウド・サーバ側にいます。

注2: 日本ではAIスピーカとも呼びますが、海外などではスマート・スピーカと呼ぶのが一般的なようです。

AIアシスタントのAlexaが、アマゾン以外の企業や大学に導入されていきました。

この流れに乗り遅れないよう、AIアシスタントを従来から搭載していたアップルやグーグルなども自社のAIアシスタント機能を搭載したデバイスを発表、発売することになり、今日のスマート・スピーカ熱となっています。

● すでに生活に密着することと組み合わせられる

スマート・スピーカが提供する機能は、音声入力による操作[アマゾンではVUI(Voice User Interface)と呼んでいる]で行うクラウド・サーバを介したさまざまなサービスで、

- クラウド上の音楽の再生
- 天気予報の読み上げ
- タクシーを呼ぶ
- 質問に対するWikipediaでの検索結果の読み上げ
- ショッピング・リストへ買いたいものを追加
- TODOリストへの項目追加
- 家電の音声操作

など、これらの機能を全て話しかけるだけで行います。既に連携するアプリケーション(アマゾンではSkillと呼ぶ)の数は万を超え、今までのスピーカの概